

# 令和 5 年度 板橋区青少年問題協議会 第 1 回専門部会

開催日時 令和 6 年 2 月 22 日 (木) 午後 6 時 30 分～  
開催場所 板橋区役所南館 6 階 教育支援センター研修室 C

板橋区青少年問題協議会 第 1 回専門部会 (居場所検討部会)

## 出席者

法政大学キャリアデザイン学部教授	児美川 孝一郎
区立中学校校長会代表	宮澤 一則
都立北豊島工科高等学校長	中里 真一
NPO 法人 Learning for All	木村 駿

## 出席職員 (幹事)

生活支援課長	渡辺 五樹
子ども政策課長	丸山 博史
生涯学習課長	太田 弘晃

## 【開会】

- ・開会挨拶
- ・資料確認

## 【部会長選出】

### ○事務局

次第に沿って部会長選出に進ませていただきます。板橋区青少年問題協議会要綱第5条第2項第2号により部会長を互選することとなっておりますが、いかがいたしましょうか。

### ○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

はい。部会長には学識経験者であります法政大学教授児美川委員を推薦したいと思いますが、いかがでしょうか。

### ○一同拍手

### ○事務局

ご異議がないようですので、児美川委員に本部会の部会長をお引き受けいただきたいと存じます。児美川委員よろしく願いいたします。

それでは部会長就任にあたりまして、ご挨拶をいただきたいと存じます。児美川委員よろしく願いいたします。

### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

ぜひよろしく願いいたします。そんなに多い人数ではありませんので忌憚のないご意見をいただいて、最終的にいいものがまとまればいいなと思っておりますので、ご協力よろしく願いいたします。

### ○事務局

それでは本日の専門部会の進め方についてお伝えします。専門部会における協議につきましては、事前にお送りした資料に沿って、皆様のご経験やご認識をもとに、ご意見を出していただき、現在の状況や課題について、皆さんで情報の共有を行ったうえで、施策の充実や課題解決に向けた対策など、今後の協議に向けた基盤を整理していきたいと考えております。

議事の進行につきましては、部会長の児美川委員をお願いいたします。協議の時間は、午後7時35分頃までとさせていただきます。ここまでで何かご質問等はございますか。（特になし）

それではここから児美川部会長に進行をお願いしたいと思います。

### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

ご案内いただいたように、今日やろうと思っていることは、いきなり何かをまとめるとか方向性をつけるのではなくて、まずはそれぞれの委員がどんな関心を持ち、どんな問題意識をもっているか、取組としてどんなことをされているのかを、ご欠席の久保委員からは資料が出ていますので、久保委員の意見もあわせて時間を使って共有しましょう。

それを踏まえて意見交換をして、どんなところが論点なのか、どこに課題がある

のかというところを出していきたい。全体で言えばブレインストーミングみたいなことです。いろいろな意見をとにかくたくさん出しましょう。それがいいとか悪いという議論は2回目以降やればいいのか、まずはいろいろな論点・意見を出すことを本日の趣旨として、一通り意見・論点が出ましたら、それを持ち帰って事務局にもご協力いただきながら、次回には少しそれを収斂させていく。ブレインストーミングを今日だとしたら、次回で少し収束していればいいのかと思います。

幹事の皆様もこれだけの人数がおりますので、必要がありそうな時にはご発言いただいているいろいろご教示いただければと思いますので、遠慮なさらずにお願いいたします。

それでは、木村委員から意見をお願いしてよろしいでしょうか。

### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

まずは、有効な居場所とあるとよい機能を考えるにあたりまして、不登校の要因や状態についてまずお話をさせてください。

不登校と言ってもその背景には様々な困難がありまして、今困難状況にあるということを示すシグナルとして、不登校という状態になっていると考えています。また不登校の状態も様々で、全く学校に行けていないとか、ひきこもってしまっているとか、あるいは登校渋りの状態であるとか、状態も様々です。

また、不登校の特に問題だと思うのは、学校に行けなくなっているという困難だけではなくて、行けないことによる影響もすごく大きいところが問題だと考えています。学習遅滞や、孤立、対人関係スキルなどが将来に影を落とすといったところも問題だと考えています。今、本人にとっての影響を挙げましたが、家庭、保護者にも影響が広がってしまうというような問題もあると思います。

そういった状況に対しまして、最終的にめざすところは必ずしも登校復帰ではないかなと思っています。将来的にその子が社会的に自立していくことをめざすことだと思います。将来のことを考えるうえでも大事だと思うのが、多様な背景や、多様な状態を踏まえながら、それぞれの形で勉強ができたり、他の人と関わったり、子どもの持つ権利を保障していくことが重要だと考えています。

そして、有効な居場所として、こういった機能があるといいのではないかとこのところ述べさせていただきます。

まずは、予防や早期対応に注力できればと思います。1度離れてしまうとなかなか戻りづらかったりするので、早期に見つけて早期に問題を解決して、日常生活に戻れることが重要なことだと思います。

次に、先ほどもお話した通り、子どもの困難が様々なので、その困難に合わせた専門性を持ったスタッフが必要だと思います。学校や居場所に配置すること、あるいは他機関と連携をすることが重要かと考えます。

また、居場所にとどまらず、学習権を保障する場として、作っていく必要があるのではないかと考えております。私は現在、校内の居場所に取り組まさせていただいておりますが、まずは学校に来ればいいのかということが中心になって、本当に大変なお子さんを見ていると、学校に来るだけで引きこもり状態にならないだけで全然いいかなと思いますが、本人たちと話をしていると、教室に行きたいや、いつかは戻らなければいけない、高校進学でいつかは勉強しなければいけないと思うけれど、ちょっと取り組みづらいとか、そういった声を聞くことがあります。

これは学校という場だからでもあります。彼らの学ぶ権利を保障するところまでやり切らないと、本当の問題解決にならないのではないかと考えています。

また、個々の多様性を尊重した形で整備していくことも重要かと思います。今まで居場所に来ているお子さんは、いわゆる貧困とかに限らず、外国にルーツがあって日本語が全くわからないから学校の授業についていけないとか、周りから孤立してしまったお子さんと出会って参りました。そうした時に日本語学校も枠数が限られており、行く場所も限られているので、そういったお子さんが居場所に来ても、どう社会に繋がっていくのかという、なかなか接続が難しいなという状況があると思っております。個々の多様性を尊重した形で居場所があるということが重要かなと思います。

あとは、校内や学校の外で居場所を展開しながら感じることは、従来の学校文化にあるような指導や、評価をするような姿勢を持ち込まないことも大事だと思います。定期テストを受けたくないお子さんがすごく多くて、その理由を聞くと「点数が悪いのがいやだ。」と、評価をされて自分が劣っているとか、そういう状況になることが彼らの授業復帰を難しくしていると思います。ただ学校は学校としての機能や、やることがあるので、難しい部分もあると思うのですが、少なくとも居場所に関しては、そういった目線を取り払っていいのではないかと思います。

また、小学生に多いですが、小学生だとある程度指導的にならないと、例えば小学一年生のお子さんですと、違うところに集中力が散漫してしまい時間内にご飯を食べ終わらないことがあって、ある程度指導をしなければならない部分はあると思います。とはいえ、「時間を守りなさい」と厳しくし過ぎたことによって、すごく落ち込んでしまい他のことができなくなることもあるので、特にしんどい状況にあるお子さんに関しては指導的な部分は持ち込まないことが重要だと思います。

あと、今お話をさせていただいたような部分を実現していく大前提として、子ども自身の意見が反映されることが重要と考えています。子どもと関わっている中で、実はこう思っていたんだなと驚かされることがあります。勉強を嫌そうにしている子が、ある日突然自分は勉強したかったという話が出てきたり、ずっと学校から離れて飄々としている子も、いざ高校に向けて何がしたいのかという話をしたときに、「青春をしたいです」という話や部活や恋愛をしたいという話が出てきて、彼らはちゃんと意見を持っていて、もっとこういうふうにしたい、こういうのがあったらいいなという意見を持っているなとすごく思います。なので、彼らの意見を聞きながら作っていくことをしないと、こちらは良い思いでやっているけれども、子どもにとっては何か違うなというものになってしまうということを感じます。

#### 【個別ケース】本人の意見を反映することで生まれる責任感・主体性

自分の意見が反映されて自分で取り組めるということになると、主体的に、それこそエンパワーメントされながら頑張っていけるので、子ども自身の意見を反映するとか、彼らの意見を尊重しながら一緒に作っていくことが重要だと考えています。

あとは、既存のコミュニティから途切れないように、完全に分離しないことも重要かなと感じています。不登校のお子さんは別の居場所に来てもらうといった支援がすごく多いです。実際しんどい状況になって「他の子と会いたくない」というお子さんもすごく多いので、別の居場所があるということはすごく意義があると思っています。ただ、学校の中や生涯学習センターで支援させていただいていると、そこで学校の子たちに出会って、もともと仲良かった子と一緒にしゃべったりしています。生涯学習センターで、ずっと不登校だけれど、小学校時代から仲良かった友達と卓球をしたり、一緒に遊ぼうということが続いていたりして、1回切れてしまったように見えてもそういう場所があると、コミュニティで繋がりながら孤立する

ことなくサポートを受けられるんだなということを非常に実感しました。ですので、一時的に避難する、一時的に別の場所に行くことも重要だとは思いますが、完全に分離しない、どちらも緩くいられるような場所が必要であるということを感じています。

居場所の機能ということで特に子どもに注目してお話させていただきましたが、保護者へのサポートも重要だと思います。不登校になった時に、本人自身もしんどいですが、保護者の方もかなり苦しい状況になっていることが多く、「どうしたらいいのかわからない」「子どもの将来が心配で、自分も最後まで支えきれのかわからない」といった不安の中で、「とにかく学校に行ってほしい」ということで子どもとの関係が悪くなったりもします。そのような場合、保護者の方に「頑張ってください」ということよりも、保護者の方にもサポートがあって、みんなが安心して過ごせるような居場所づくりが必要かと考えています。

以上です。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

ありがとうございます。

体系的にたくさんのご意見をいただきました。今日は「ホワイトボードに大事な論点を書いてください」と事務局にお願いしてあります。このあたりの議論は空中戦になるとよろしくないなので、「何が出たかな」という点を常に見ていただき、確認しながら進めていければと思います。

よろしければ今の木村さんの話についてご質問があれば、せっかくですからいくつかやりとりをしたうえで、次の方に進みたいと思います。

ちなみに、学校文化という点では指導や評価ということがどうしても出てくると思います。後のお二方が学校関係なので、ぜひ発表の時にその部分に関するコメントをいただくとして、それ以外で「ちょっと聞いてみたい」というところがあればと思いますが、いかがでしょうか。

#### ○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

専門性を持った人材はどういう方をイメージしていますか。

#### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

私が想定しているのは、外国にルーツがあるお子さんの対応や、発達障がいのお子さんを見てみると、居場所でカバーできる部分とそうでない部分がありますので、そういった分野での専門性であったりします。また、学習面に関しても、一般の方ができると、そうでない部分があると思いますので、学習サポートでの専門性もあります。そもそも子どもと関わることの専門性もあると感じています。不登校のお子さんは特にしんどい状況にあるので、普通の子だったら気にならないとか、さらっと流せるようなことがとても傷つくことがあるなと思っています。一人ひとりの考え方を受けとめて、それに対して傷つかない形でコミュニケーションをとるとか、より本人がエンパワーメントされるようなコミュニケーションをとるといったことも重要になるので、その点も含めて専門性に入ってくると感じています。

#### ○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

専門性というと、医療とかのイメージですがそれだけではなくて、広い意味で人

材の確保ということですね。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

文科省がチーム学校と言っているよりは、もう少し広いですよね。もちろんチーム学校ももちろん大事ですが、そのうえでさらに全体で子どもを支えていくということですね。

#### ○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

私もそれは賛成で、今学校で居場所を作りなさいと言っていますが、誰が面倒見るのかというときに、学生ボランティアや地域の人であったりしますが、不登校は背景が様々ですし、それなりに専門性といったいろいろな配慮が必要になってきます。そういった点では、ボランティアに任せればよいという流れがありますが、教育に携わっている人、心理のことを知っている人が本来、不登校の生徒を対応した方がいいと思います。

また、地元の民生委員さんからも聞いていますが、地域コミュニティとの繋がりが、地域としての機能が薄れてきています。子どもに限らず大人のひきこもりも多いです。地域の行事や会合に出すような手だてが必要で、そこに子どもたちも一緒にいればよいと思いますが、具体策が見つからない現状ですので何か具体策はありますか。

#### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

生涯学習センターはそういう場所になっているなど感じています。ケースワーカーさんが、家にずっといるお子さんを連れてきて利用するようになったり、私自身ですと、中学校の校長先生と連携させていただいて、全く外出できていませんというお子さんを、生涯学習センターで行っている支援に繋がらせていただき、最初は他の子と混ざらず数人だけの支援の中で支えていました。するとだんだんその場所に対しても愛着がでてきて、一緒に支援を受けている子たちと仲良くなって、その子たち同士で生涯学習センターに遊びに来るようになって、他の子ともまた出会えるようになっていったりしています。いろいろな人が自由に来ることができるスペースは、特に中高生年代はコミュニティから切れない場所になっているなど感じています。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

子どもの権利という角度から捉えて、学ぶ権利も、人間関係を結んでいく権利も、それをどうそれぞれの子たちに合った形で保障できるかということを思いながら聞いていましたが、学ぶ権利をどう保障するかの方がまだ考えやすいですが、人とつながる権利、人間関係を作る権利について、「こんなことをやっています」や、どういうことをすればよいという具体的なイメージをお持ちですか。

#### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

不登校のお子さんに合わせた支援や、いろいろな子が来ていいよというユニバーサルな居場所というのを近くで両立させることが重要だと考えています。私どもは生涯学習センターの他に校内でも居場所支援を行っておりまして、そちらだと、どんな子でも来ていいよ、一時的にでもしんどかったら来ていいよという場所になっています。基本的にその学校のお子さんはある程度その場所を使えると知っていて、

教室に一旦行けなくなり、別室で登校しているという状態になっているお子さんでも、教室から友達が来たりして、教室には戻れなくても別室で楽しくしゃべったりしています。そうすると、完全に切れてしまいもう会えないとなることなく、その子たちの関係性を持ったまま、個別のサポートを受けることができるので、誰でも来ていいよという場所の中で、ある程度クローズにやるみたいなことが結構有効ではないかと感じています。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

要するに理論的にはターゲット支援とユニバーサル支援をくっきり分けるというより、混ざるようなことを考える、ユニバーサルから入っていった中でその子が安心安全な空間も上手に作ってあげるような感じですか。

#### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

そうです。利用者も、完全不登校のお子さんだけではなくて、一時的にちょっと休みたい、そういったお子さんを受け入れていくと、先生方もまず使ってみようとなります。ただ「不登校の子の居場所です」としてしまうと、そういった子は今後來づらいと思いますし、先生も利用しようと思えないですが、一時利用でもいいですよと、ちょっと別の教室にいたいお子さんであれば誰でもいいですよという形にすると、そういった方から繋がってくるので、かなりハードルを下げて使えるような場所にするということもポイントかなと思います。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

わかりました。

それでは次の発表をお願いしたいと思います。宮澤委員お願いします。

#### ○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

まず不登校の要因は学校現場から見て多様化しています。今の不登校は、年間 30 日を超えたら不登校ということになりますが、中身的には毎週月曜日は休むが火曜日は来るとか、行事の前だけ来る子もいます。あるいは移動教室や合唱コンクールが近づくと来るという子もいますし、一方で全く来れない生徒もいます。ですから不登校の捉え方をもう少し整理してもいいのかなと思いますし、それによって対応も変わってくると思います。

板橋区では今年度、小中学生で不登校が 1,000 人を超えてしまい、中身を見てみると一番多い原因が「何となく」というのが全体の約 40%です。この「何となく」というのにどう対応するかは非常に難しいと捉えております。

不登校が起こる理由として考えられるのは、学校という仕組みの中で 40 人までの教室、こういった制度がもう時代に合っていないのではないかな。この教室というスペースに押し込むというのは大人の目線、先ほどありましたが子どもの目線から見たら、1人で勉強したい子もいますし、家で画面を見ながら勉強したいという多様性が出てきていますが、それを一律に押し込むというところに今、無理がきているのではないかと思います。そこで、居場所ということですが、学校に来られない生徒にとっては、学校の中の場所というのはハードルが高いです。うちの生徒でも学校が見えてくると足が止まってしまうという生徒がいました。その時にお願いしたのは、地域センターです。「地域センターの集会室は昼間空いていますか」「はい、空いています」ということで、地域センターには区の職員が必ずいますので、

「生徒が勉強する時に横にいて見ていただけますか。居るだけでもいいです」と、「我々も時間が空いている時は指導もやります」と。コロナで中断してしまいましたが、現在は再開の準備はできています。地域センターであれば、いろいろな地区にあるので、ぜひこれは広めていけたらいいなと思います。

あとは、不登校の居場所ということでフレンドセンターというのが板橋区にあります。そこに通っている生徒もいますが、なかなか続かないという現状があります。板橋区内でも1ヶ所で、しかも不便な場所にあるので足が遠のいてしまう。一つどうかなというアイデアですが、ちょうど昨日は都立高校の入試でした。今人気があるのは通信制です。これがすごい人で、11月ぐらいには通信制の試験があって合格発表がありますが、どんどん人気は高まっています。子どもたちに「どうして通信制に入りたいの」と聞くと、「自分で好きな時に勉強ができる」「週に1回レポートを出せばいい」ということで、いろいろ仕組みを聞いてみると、單元ごとの動画があって、それを学校だったら1時間目、8時50分から9時40分までみんなと一緒に受けなければいけない。でも、通信制は自分で好きな時に動画を見て授業を受ければいい。フレンドセンターでもそういうことができればと思います。單元ごとの授業の動画を撮って、それを順番に見ていけば単位として認めましょうという、まだこれは公立学校ではやっていないと思うので、通信制の学校みたいなものがあるのもいいのかなという意識はあります。そうすればいつでもどこでも学びの機会は増えるのかなと思います。

あとは、まなぼーと大原と成増ですが、中学校は板橋、上板橋、赤塚・高島、志村地区と4つのエリアに分かれているので、地区に一つずつあると割と近いところに通えるのかなということで、充実を進めていただければと考えております。

そういった点では、動画配信ということを考えると、家が居場所でもいいのかなと思っております。学校としては、不登校の生徒を今までは家庭訪問など色々やっておりましたが、もう限界に近づいています。うちでも来たり来なかったりする生徒をカウントすれば30人ぐらいいますので、その子たちに毎日「今日は行かないか」ということはもう無理ですし、学校に来たら何とか世話をしたいけれど、そこまで来るのは福祉やいろいろな力が必要かなと思っているのが現状です。

今うちの学校では別室として、授業を受けられない人はどうぞということで図書室を使っています。机を離してやっていますが、ある学校では個性が強いメンバーなのでそこでトラブルが発生していると聞きます。またそこが次の課題に繋がっています。学校はあまり個室がなく、小さな部屋で落ち着いて勉強したいという子にとっては、パーテーションでもいいからちょっと仕切って、自分のリズムで勉強できるとか、自由に使える、時間と場所があればいいのかなと思います。

あとは、不登校や支援が必要な子どもに対しては、早期発見ということで、板橋区ではC4thで出欠席の情報をデータ入力しています。そこで、就学援助を受けているとか、歯の治療が遅れているとか、いろいろなデータを合わせていけば、ある程度心配な子を浮き彫りにできるのかなと思います。大阪の箕面市とかですでにやっている自治体もありますよね。そんな感じで、早めに手立てがとれるといいかなと思っています。以上でございます。

## ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

板橋区でやっているC4thは、都でやろうとしている子どもの情報が一元管理できるダッシュボードみたいなものですね。板橋区でもやっているのですか。



○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

区は出席状況ぐらいです。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

先行自治体によってはかなりいろいろなデータを入れ込んだりする例も全国でいくつか出てきていますけれど、都と板橋とはほぼ同じぐらいの状況ですか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

まだデータ入力してもそれが有効活用されている段階とは言えないです。いまだに不登校調査は紙媒体です。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

わかりました。

宮澤先生のご発言について、ここを深めたいとかもう少し聞きたいことがあれば出していただければと思いますが、いかがでしょうか。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

同じ現場の人間からすると、40 人学級は崩壊していると思っていますので、中学校は働き方改革という名のもとに、何とかしようとしています。中学校の先生たちの仕事量は高校もそうですが減っていないどころか、不登校対応を考えると増える一方です。それで働き方改革と言われた時にやれるわけがないと思ってしまいます。これが 25 人学級になったら違うのだろうと正直思います。板橋区が先行してやってくだされればと本当に思いました。25 人学級だったら、先生たちも目が行き届くし、その分不登校の子たちのために教員をさらに増員していく対応が取れば、教員が外部に行くということが大分減ってくるし、外部もさらに手厚くできるということなのかなと、宮澤先生の話聞いて思いました。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

コロナの時に、一時期分散登校で半分ずつ来させた時期がありました。あのときは全然違いましたよね。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

はい。完全不登校の生徒がその時は来しました。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

あの経験を我々も知っているわけなので、お金がかかることがあるにしても、そういうことを本気で考えることは大きい話ではありますよね。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

やっぱり子どもは財産ですからね。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

未来への投資ですからね。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

先生たちも疲弊していて、世間でもブラック業務って言われているので、教員のなり手がどんどん減っていく。小学校は1.何倍です。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

まずは目が行き届くようにするのと、子どもたち自身が安心していられるような小さな集団にするといった手法もあると思います。ただ、そこからさらに進んで集団ではなく個人の方がいいという意見もあるわけです。そこをどのように、グラデーションもあるでしょうけど、対応するか。要するに学校という形が仮に20人学級でも難しいことだってあるかもしれない。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

学校に来させるという前提ではなく、学校でなくてもいいのではないかな。家でもいいし地域センターでもいいしということですよね。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

先ほどのビデオでのオンライン学習でもいいのではないかなというのは、フランスではそういうのがあります。公教育・義務教育の小中学生で行けないという子は、家でそれを見ればいいというものを、国立のセンターが教材を全学年分作って、学習すればいいとしています。義務教育ですが、学校に行く義務ではなく、学ぶことをちゃんと保障されるということなので、国や社会が学ぶ権利を保障してあげる義務を持っているので、そういう子にはビデオでいいでしょうということを、昔からやっています。だからコロナの状況になり、学校に来られなかったとしても困ることなく、そういう教材を使って民間に頼ることもなくできていました。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

ただ学校現場とすると、全部家でやればいいのかというと、学校はいろいろな人が集まっていて、その中で合意形成とかトラブルを乗り越える、そういったのも必要かと思います。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

そこを解きほぐしていきたいと思います。個々の子どもの事情やニーズに応じて対応するということと、多様な子が一緒にいる学校というところをどういうふうに全体整理できるかなと思います。

ちなみに、今はストレートで通信制をめざす子が増えてきていますか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

多いです。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

一旦高校行ってやめたからではないですよ。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

違います。最初からeスポーツに入りたいという子も多いです。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

だから都立高校の人気の落ちている。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

広域通信制と言われるような、そういう学校が多いですか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

はい。そうですね。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

N 高 S 高が多いです。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

すごくわかりやすいですね。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

数も増えています。他の東京都の私立の学校ですと、12 月 15 日から交渉開始という日程が決まっていますが、通信制は 11 月から交渉できますので、家庭や生徒から見ても「早く決めて、安心したい、しかも自由に勉強ができる」ということで、もうどんどん志願者が増えています。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

大学生でも通信制は一般の教員試験の前に採用試験があるので、みんな先に合格を取って、一般を受けて落ちたら、通信制に進みたい子はたくさんいます。

それでは、他にありますか。木村委員どうぞ。

○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

先ほど個性の強い子のトラブルで問題が起きているという話がありましたが、そこでどのようなスキルを持った先生がいれば上手に対応できるのかをお伺いしたいです。先ほど、こちらでも専門性の話をさせていただきましたが、学校の先生から見ても、こういった専門性やスキルが必要だと感じられているか、お伺いしたいです。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

学校は毎年春先に、配慮が必要な生徒の情報交換をしています。この子は注意すると切れてしまうとか、教員が一人ひとりの生徒の特性を知ったうえで指導ができるといいですね。みんなの前で注意したらキレてしまう。でもそっと呼んで「ちょっと静かに勉強できないかな」なんて言うと、「はい」と素直に聞く子もいますので、そういったことを知っていればいいと思います。子どもたちが騒ぐ時は、何かしら理由があると思いますので、その時にいきなり「静かにしろ」と言うのではなく、まずはそこを聞ける教員、スキルというのは大事だと思います。

○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

一人ひとりのことをちゃんと知っているとか、話をきちんと聞くことはとても大事だと思います。そういった情報共有も、その子に関わる大人はある程度できていると、すごくいいのだろうなということは私自身もすごく感じます。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

今通常級でも配慮が必要な子どもは10%ぐらいいると思います。国は6.5%と言っていますが、実際はもっと増えていると感じます。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

それを40人学級で対応しなさいと言われていたわけですね。

一旦、中里先生のご意見をお聞きしたうえで、全体でまた意見交換できればと思いますので、よろしいですか。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

高校は小中学校と少し違うかなと思いながらお話を伺ってしまして、今まで不登校の方に目が行きがちな話が多かったですが、受け入れる側の立場で言うと、この子たちがどのように激変していくのかというのを目の当たりにしているので、居場所さえ、環境さえ整えば、絶対来れると思います。

今年の1年生は、11人でスタートしました。集団生活というほどの集団じゃないですが、楽しさを覚えると休まず来ています。その子たちはその子たちの中で、お互いに気を少し遣いながら、スポーツが得意な子もいれば、右手と右足が一緒に出てしまう子もいて、一緒に体育をやっている、ちゃんとそこに気を遣える子たちなんだなというのが、よくわかります。やはり自己肯定感とか自己有用感が、ちょっと満足すると続くのかなと思います。

環境を変えてあげることと、中学校だけでなく地域の人たちに、こういう場所があることを理解してもらうと全然違うのかなという気がします。

今、定時制で辞める子は、昔みたいに単純に学校来なくなってやめてしまう子はいません。転学、親の都合でというケースはあります。勉強ができないからやめるとはいう子はいないです。面倒みます。それはうちだけでなく、大山とか有徳とか、この辺にありますけど、どこの定時制でも同じような状況です。その代わり、どこも10人以下ですので、少人数とか25人学級ぐらいが中学校で実現できると、不登校は減るだろうなということは、すごく実感しています。

また、自分が認められる瞬間を作ってあげる。例えば、定期考査の1回目はものすごく簡単な問題を作って、みんな50点以上取れるようにします。そうすると、「自分もしかしたらできるかも」という勘違いが起きます。勘違いが起きると定期考査がそんなに怖くなくなります。それは全日制でも一緒です。全日制も不登校傾向の子が、うちは少なくはないです。発達障がいを抱えた子も少なくないです。その子たちにとって自分が認められるかもしれない瞬間を作ってあげる。1個作ってあげたら次のハードルは少し高くして、最後は「国家資格のこれをめざそうか」としていく。その資格がどんなに簡単な資格でも、例えば講習を受けるだけで資格が1個取れるだけで彼らの中ではすごい自信になり、こんなに勉強ができなかった子が、電気工事士を受かるぐらいのレベルまで伸びることがあります。その自己肯定感からその先にある、社会から認められるという自己有用感に結びついていき、高校の役割は税金を払える子を作ることですから、最終的にそこに結びついていけばいいかなと思います。

また、中学と高校の不登校は若干違うかなと思います。起立性障がいの子で、メンタルではなく来れなくなる子も高校の不登校では少なくないです。それから、ヤンチャ系の子で外の世界が楽しくて来ないという子も、少なからずいます。それも不登校のとしてカウントされます。

小中の時の気持ちが落ちてとか、家庭の問題でというのは、高校生だと自立してくるので少し違うかなという気がします。それでも、受け入れる側としては、彼らが変わるチャンスを作ってあげることができる気はしています。

もう一つは自己有用感や自己肯定感に結びつきますが、不登校傾向の子はもしかすると、高いレベルの学校に行くよりも、ちょっと下からスタートさせてあげた方が楽に行けて、もしかするとそこから先大学に行きたいと言ったら、勉強すればいいと思います。うちでも、それで気が付いて数学の先生にマンツーマンで教えてもらい、一般受検で受ける子はうちではほとんどいませんが、今回一般受験で大学受かりそうな子もいます。まずは自信を持たせてあげることが一番かなと思います。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

ありがとうございます、何か気になることがありますか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

定時制というと、昔は昼間仕事をして、夜勉強という感じでしたが、今外国籍とか高齢者とか、どんな感じですか。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

今はうちですと、1学年1クラスが4学年で26名ぐらいです。その中で外国籍の子が6人ぐらいいます。その子たちはネパールの子が多いですが、日本語検定をめざして頑張っています。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

定時も工業科ですか。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

工業です。

今の1年生は工業科の実習はさぼらないです。座学じゃないのが楽しいみたいです。体育とか楽しそうです。集団で何かをやるというのは、一人一人が役割がわかっていれば嫌じゃないんだろうなと思います。また、先生たちもうまいです。作品づくりをやらせて、「君が作ったものはこんなに役に立つんだ」と言います。まずは高校で社会に出る前の学生生活をということであれば、普通科行くよりももしかすると、農業・商業・工業とか、ちょっと技術系が混じった方が楽しいのかもしれないですね。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

小中と高校では不登校と言っても少し違いがあるという感覚は、宮澤さんわかりますか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

やっぱりあります。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

何がその差になるんでしょうか。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

昔は中学校で勉強とか友達関係で学校行きたくないということがありましたが、今はさっきのような、何となくということでした。行事のときや宿泊のときだけ来て、友達もよく来たねと言うんです。でも今お話を聞いていて中学校ですとやはり、先ほども出ました評価という点ですね。9教科の期末テストをやって、点数が出てくると、良い子にとっては自信になりますが、出来が悪い子にとっては、「君はできない」「駄目なんだ」ということを伝えているようになるので、中里先生のように、勉強ができなくてもこんな技術的なものを作れる、自分でもできることがあるということを見つけられる点はすごくいいなと思いました。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

中学ですと高校入試も見えますので、そこを意識せざるを得ないですね。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

居場所の一つとして、全日制の40人学級35人学級みたいなところだけでなく、昼間学校ではなく夜学校でもいいというような、先ほど宮澤先生が言われたように、それぞれ学び方がいろいろあっていいのかなという気がします。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

それは、チャレンジスクールみたいに、午前・午後・夜という枠組みですか。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

三部制だと、定時に近いほど人数は少なくなります。だから入りやすく、入ってしまえば今度は逆に、中間のところでの講義も自分のペースに合わせて聞けるといところはあります。

でも一方で学校という場には来たいということは感じます。中学の時の先生に話を聞くと、髪の毛は伸び放題、服装は気にしない、どちらかと言うと薄汚れたような格好をしていた子がさっぱりした格好で来ています。毎日学校に来て、他の子と会わなきゃいけないから、変わってきます。不潔感は全くないです。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

木村さん。

私も、不登校のフリースペースに学生を行かせたりしていて、何度も行ったことがあります。中学校までは完全不登校だったけれど高校は行きたいという子は、支援されているお子さんで結構いますか。

○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

います。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

高校でやり直したい子の感覚は何でしょうか。

○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

関わっていて感じるのは、学校自体は行きたいと思っていて、友達は欲しい、部

活動的なこともしたい、という気持ちが根本にある子が結構多いです。ただ、他の部分でどうしてもしんどくなり、この学校には行きたくないということが多いですが、基本的には学校生活を楽しみたいということが、根底としてあるんだなとすごく感じます。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

新しい環境があれば、そこでやってみたいということでしょうか。

#### ○木村委員（NPO 法人 Learning for All）

そうです。彼らも学校で青春というか、楽しく過ごすことができると、行きやすいし行きたいと思う場所なんだなということを感じます。

小中学生は年齢が幼いので、学校もより指導をしっかりするので、そこに合わないともう無理みたいになってしまうのかなという気はします。そういう意味でも小中学校の不登校の子と高校の子は状況が違うと思います。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

終わりの時間が気になってきましたので、ご欠席の久保委員から資料が出ておりますので、事務局から簡単にご紹介いただけますか。

#### ○事務局

本日ご欠席の久保委員から事前に資料をいただいたものを皆様の机上にも配布させていただきます。

久保委員は、フリースクールの立場から様々なお子さんと接する中で、不登校の要因・原因をきちんと把握することと、不登校のお子さんが、どういう状態なのか、先ほど先生がおっしゃられた通り、全く来られないのか、週に1回は来られるのか、この場所だったら来られるのか、そういった不登校の状態をある程度整理をしながら、まとめていただいた資料になります。

こういう要因のお子さんにはこういう場所が、こういう状態のお子さんにはこういう機能の居場所が必要ではないかという点を体系立ててまとめていただいておりますので、後程目を通しいただきながら、また後日久保さんのご意見も取り入れたうえで本日のまとめを事務局で整理し、皆さんにご提示したいと思います。

#### ○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

今日ご欠席ではありますが資料をいただいておりますので、お目通しいただき参考にしていただければと思います。私の感想ですと、居場所はすごく狭く捉えた場合は学校外での居場所になりがちですが、全然そういう議論ではなかったですね。むしろ学校がどう変わっていかなければならないかという点を議論しないと始まらず、学校と居場所は別々でそれぞれが対立してという話ではないということは、今後ぜひ活かしたいと思います。

それぞれの子どもをどう支えるかが目的ですので、学校の固有の役割や、できることは何なのか、逆に学校外だからこそできることは何なのかということも、言葉にしていったうえで、両方の連携ができればいいなと思います。学校の居場所機能を見ると、すごく大事なところだという議論は、今日かなり豊かにできたなという感想を持ちました。

せっかくですので、お一言ずつでもあればお願いします。

○木村委員（NP0 法人 Learning for All）

子ども自身・当事者の意見を拾っていけるといいなとすごく思っています。今日も、当事者不在のところで話が進むというのが、実は彼らが一番話を聞いて欲しいと思っているので、そういう場を今後作れるといいのではないかと感じています。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

そうだとしたら、こんな時間に開催でいいのでしょうか。

○木村委員（NP0 法人 Learning for All）

むしろこの時間の方が来やすいかもしれません。

○中里委員（都立北豊島工科高等学校 校長）

不登校という言葉は昔はほとんどなかったですし、学校は行くものだと思っていて、いつの間にか不登校が増えたのは、学ぶ場が広がり、彼らの中で目的が学校だけでないという点が変わってきたと思います。不登校は別に悪いことでないことを彼らには発信したうえで、本人が何をしたいのかということなのかなと思います。

○宮澤委員（区立中学校校長会 代表）

不登校は悪いことでないことをまず払拭してあげなければならないと思います。

あとは学校でできる役割分担を明確にして、どう有効な有機的な繋がりができるかというところで、網羅的に子どもを支えていかないといけないと思いました。

○児美川委員（法政大学 キャリアデザイン学部教授）

文科省が生徒指導提要进行を改定して、1・2年前ぐらいに話題になりましたが、不登校の項目をよく読むと、現状を問題視するのではなく、どのようにその子を社会的・経済的に支えるか、最終的には進路の問題として、学校に戻すか戻さないかではなく、その子がどうしたら社会的・経済的に自立していけるかを包括的に考えましょうという話です。進路形成に学校・学校外・家庭で何ができるかという視点も今後は必要かなと今日の議論で思いました。もちろん学ぶ権利、人とつながる権利、人間として自己肯定感を持てることがベースになりますが、そのうえで、彼らがどう捉え社会に出ていけるか、そこをどう支えていくのかを考えていくべきかなと思いました。

○事務局

それでは、長い時間にわたりご議論いただきありがとうございました。最後に事務連絡をさせていただきます。

本日ご協議いただいた内容は事務局で整理し、次回の専門部会の前に整理内容・今後の検討内容をお伝えさせていただきます。次回の専門部会は令和6年6月の午後6時30分から、場所は本日と同じ教育支援センター研修室で開催を予定しております。日程調整のため、後日ご連絡させていただきますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、以上を持ちまして、令和5年度板橋区青少年問題協議会第1回専門部会を閉会とさせていただきます。本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございました。